

平成 26 年度大学職員情報化研究講習会～基礎講習コース～
研修報告 A 班 2 グループ (お～い A2)

1. テーマの選定理由 (テーマ：学力の高い学生を育てる)

私たちのグループでは、大学が担う役割は、大きく分けて「教育」「研究」「社会貢献」の 3 つがあると考えた。3 つの役割の中でも、特に、社会・学生からの関心・要請が大きいものは「教育」だと考え、学生の学士力確保について検討することとした。文部科学省によると、学士力とは、1. 知識・理解、2. 汎用的技能、3. 態度・志向性、4. 統合的な学習経験と創造的思考力とされているが、私たちは、これをかみ砕いて「学士力＝学力＋人間力＋社会力」とした。人間力、社会力については、社会に出てからでも学べる部分がある反面、専門性の高い学びや、その前提となる基礎学力といった「学力」については、大学在学中に身につけるべきものであるため、「学力」に重点を置くこととした。

2. 現状の問題点

現状の問題点は、「学士」を与えられても、それに見合った「学力」を身につけていないことであり、この原因の一つは、学生が行なう予習・復習時間の減少にあると考えた。大学設置基準による予習・復習時間は 1 コマ (1.5 時間) の授業につき、各 1.5 時間とされている。つまり、単位取得には、講義時間以外に 3 時間の予習・復習が想定されているのである。しかしながら、多くの学生が、予習・復習を行っていない。その理由として、次の 2 点が挙げられた。第一に、学生の目的意識、および大学への帰属意識の希薄化等による学生の受動的な学習態度である。特に、ネームバリューだけで大学を選んだ学生、不本意入学をした学生は、学びに対する目的意識が低く、「卒業する＝単位を取得する」ということ自体が目的になってしまっていると考えられる。第二に、就職活動の早期化・長期化という社会的背景による、単位取得期間の短期化である。四年制大学では、本来 4 年間かけて所定の単位を取得することが想定されているにも関わらず、ほとんどの学生が、1 年間余りを就職活動に充てなければならない。つまり、実質 3 年間で 4 年分の単位を取得せざるを得なくなり、1 年間の選択講義数が増加し、一つの講義の予習・復習時間を確保することが困難になっているのである。

3. 解決策の検討

そこで私たちは、予習・復習を伴った質の高い勉強をしてもらう方法を模索した。学生に勉強してもらうためには、学生の目的意識・帰属意識の向上、効率的な予習・復習の習慣化、アクティブラーニング導入、奨学金によるモチベーションの向上などが挙げられた。その中で、「効率的な予習・復習の習慣化」に着目し、学生に予習・復習を習慣化させるために、予習・復習を義務化した必修科目について ICT を活用する、「必

修科目における課題提出型予習・復習の回答システム」を提案することとした。

これは、大学1年次に特定の必修科目において予習・復習を義務化し、予習・復習した内容を Web 上で提出させるというものである。

この取り組みを1年次の必修科目で行なうことで、他の講義でも、予習・復習をする習慣をつけさせる狙いがある。また、「学び」の意識付けにもつながると考えている。

しかし、必修科目では、必然的に履修者が多くなるため、予習・復習内容の提出物の回収、チェックには、教員に多大な負担がかかることになる。そこで、一連の作業を Web 上で行なうことで、教員は、煩雑な回収作業から解放され、学外からも提出物を確認することができる。

また、提出させたもののチェック機能については、教員だけでなく、学生にも担わせることを想定している。例えば、履修者100名の講義であれば、50名に予習・復習の成果物の提出を課し、残りの50名には成果物をチェックすることを課す。成果物を提出する学生だけでなく、それをチェックする学生も、チェックのために予習・復習を行なう必要性が出てくるのである。チェック項目については、予め教員が作成し、チェック方法には一定の基準を設ける。(体裁は PPT 資料を参照)これは、単純な例でいえば、教員は、本来100枚の提出物をチェックするところ、50枚のチェックで済む、といった教員の業務軽減も視野に入れている。

こうしたチェック機能を備えることで、学生の予習・復習内容の質の保証ができると考えている。学生同士でチェックを行なうことで、高い評価を受けた学生はモチベーション向上に、また、低い評価を受けた学生も、次回からは努力しようという意識改革につながるのではないだろうか。また、教員が、質の高い予習・復習内容をモデルとしてクラス全体に共有し、全体の学びの向上のために活用することもできると考えている。

4.まとめ

3の提案には、まだまだ検討しなければならない課題が山積していることは承知しているが、それらを解決し、実現に至った際には、学生の予習・復習が習慣化され、能動的な学習態度が身につくのではないだろうか。つまり、学力の高い学生を育てることができると思う。

学生が変化する社会を、人生を生き抜くために必要であり、社会からの要請も大きい、「学士力」の一端である「学力」について、今後も検討していくための一助となった。これからも、大学改革にかかる様々な課題解決について検討していきたい。